PATENT ABSTRACTS OF JAPAN

(11)Publication number:

11-286417

(43) Date of publication of application: 19.10.1999

(51)Int.CI.

A61K 7/11

(21)Application number: 10-103619

(71)Applicant: SHISEIDO CO LTD

(22)Date of filing:

31.03.1998

(72)Inventor: OMURA TAKAYUKI

SHIOJIMA YOSHIHIRO

(54) HAIR COSMETIC

(57)Abstract:

PROBLEM TO BE SOLVED: To obtain a hair cosmetic not only having excellent hair dressing power, but also exhibiting a slight feeling of greasiness and providing hair with smoothness and excellent combing properties, by including wax fine particles containing a wax solid or semisolid at a normal temperature, a phospholipid, a protein, etc. SOLUTION: This hair cosmetic comprises (A) a wax fine dispersion containing (i) a wax (e.g. beeswax or the like) solid or semisolid at a normal temperature and (ii) a nonionic surfactant (e.g. POE monooleate or the like) having preferably 6-15 HLB and (B) a silylated peptide of formula I " (R1 to R3 are each a 1-3C alkyl or OH; R4 is a residue after removal of a terminal amino group of a basic amino acid containing the amino group at the end of a side chain; R5 is an amino acid side chain except R4; β is 1 or 3; (m) and (n) are each 0-200; m+n is 1-200) of formula II. In the cosmetic. the formulated amount of the components B is 0.01-30 wt.% and the formulation ratio of the wax/the silylated peptide by weight preferably about 0.5-1,500.

ŢĪ

I

LEGAL STATUS

Date of request for examination

[Date of sending the examiner's decision of rejection]

[Kind of final disposal of application other than the examiner's decision of rejection or application converted registration]

[Date of final disposal for application]

[Patent number]

[Date of registration]

[Number of appeal against examiner's decision of

rejection]
[Date of requesting appeal against examiner's decision of rejection]
[Date of extinction of right]

Copyright (C); 1998,2003 Japan Patent Office

(19)日本国特許庁 (JP)

(12) 公開特許公報(A)

(11)特許出顧公開發号

特開平11-286417

(43)公開日 平成11年(1999)10月19日

(51) Int.CL6

鐵別配号

ΡI

A61K 7/11

A61K 7/11

審査請求 未請求 請求項の数7 FD (全 22 四)

(21)出願番号 特顧平10-109619 (71)出願人 000001959 株式会社資生量 東京都中央区銀座7丁目5番5号 (72)発明者 大村 幸之 神奈川県横浜市港北区新羽町1050番地 株式会社資生堂第一リサーチセンター内 (72)発明者 塩島 義治 神奈川県横浜市港北区新羽町1050番地 株式会社資生堂第一リサーチセンター内 (74)代理人 弁理士 労祸 祐可

(54) 【発明の名称】 毛髪化粧料

(57)【要約】

【課題】 整髪力に優れ、べたつき感が少なく、かつ毛 髪になめらかさ、くし通りのよさを付与することができ る毛襞化粧料を提供することにを目的とする。

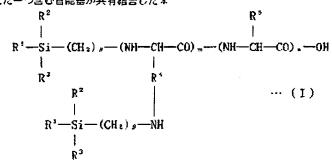
【解決手段】 常温で固体ないし半固体のワックスを含むワックス機能子と、リン脂質およびタンパク質ないしタンパク加水分解物およびそれちの誘導体から選択される一種または二種以上とを含有することを特徴とする毛髪化粧料。

(2) 特闘平11-286417

【特許請求の範囲】

【請求項1】 常温で固体ないし半固体のワックスを含 むワックス微粒子と、下記一般式(I)または(II)で 表されるアミノ酸側鎖のアミノ基を含むペプチドのアミ ノ基にケイ素原子をただ一つ含む官能基が共有結合した* *シリル化ペプチドの一種または二種以上を含有する毛髪 化桩斜。 一般式(i):

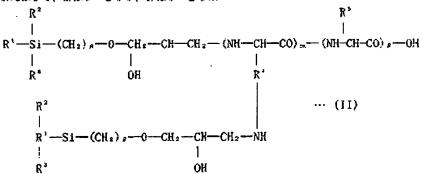
[ft1]



[式中、R1、R1、R1 は炭素数1~3のアルキル基ま たは水酸基を示し、これらのR¹、R¹、R¹はすべて 同じでもよく、また異なっていてもよい。R1 は側鎖の 末端にアミノ墓を有する塩基性アミノ酸の末端アミノ基 20 一般式(II): を除く残基を示し、R1はR1以外のアミン酸側鎖を示 し、Bは1または3で、mは0~200、nは0~20%

※0. m+nは1~200である。 (ただし、 mおよび n はアミノ酸の数を示すのみで、アミノ酸配列の順序を示 すものではない)]で表されるシリル化ペプチド。

[ft2]



f式中、R1、R1、R1は炭素数1~3のアルキル基 または水酸基を示し、これらのR*、R*、R*はすべ て同じでもよく、また異なっていてもよい。 R*は側鎖 の末端にアミノ基を有する塩基性アミノ酸の末端アミノ 基を除く残基を示し、R*はR*以外のアミノ酸側鎖を示 0. m+nは1~200である(ただし、mおよびnは アミノ酸の数を示すのみで、アミノ酸配列の順序を示す ものではない) 1で表されるシリル化ペプチド。

【請求項2】 請求項1に記載の化粧料において、界面 活性剤として両性界面活性剤および/または半極性界面 活性剤と、非イオン性界面活性剤を含むことを特徴とす る毛髪化粧料。

【調求項3】 請求項1または2に記載の化粧料におい て、シリル化ペプチドの配合量が、組成物全体に対し

て、0.01~30重置%であることを特徴とする毛髪 50 剤) の配合重量比が0.03~0.5であることを特徴

化桩斜。

【請求項4】 請求項1~3のいずれかに記載の化粧料 において、ワックス/シリル化ペプチドの配合重量比が 5~1500であることを特徴とする毛髪化粧料。

【請求項5】 請求項1~4のいずれかに記載の化粧料 U. \mathcal{B} は1または3で、mは $0\sim200$ 、nは $0\sim20$ 40 において、ワックスの微細分散物を調製後、シリル化ベ プチドを添加することを特徴とする毛髪化粧料の製造方

> 【請求項6】 請求項5に記載の化粧料の製造方法にお いて、用いられるワックスの微細分散物中の全非イオン 性界面活性剤の加重平均した目LBが6~15であるこ とを特徴とする毛髪化粧料の製造方法。

> 【請求項7】 請求項5または6に記載の化粧料の製造 方法において、用いられるワックス微細分散物中の両性 界面活性剤/(両性界面活性剤+非イオン性界面活性

(3) **特関平11-286417**

とする毛髪化粧料の製造方法。

【発明の詳細な説明】

[0001]

【発明の属する技術分野】本発明は毛髪化粧料、特にそ の使用感の改善に関する。

[0002]

【従来の技術】従来、毛襞化粧料には、毛髪に光沢やな めらかさを与え、かつ良好なセット保持力を与える目的 で、樹脂とシリコーン油、高分子シリコーン、エステル のとを併用したものや、さらにタンパク分解物を配合し たものが多く用いられている。また、毛髪化粧料には、 整髪力を付与する目的で、ワックスが配合されることが あるが、塗布部分べたつきが著しく。またギラツキ等を 生じることもあるため、各種エマルションとして用いる ことが多い。該組成物の例として、特開平3-211 2. 特闘平4-230616号公銀がある。

[0003]

【発明が解決しようとする課題】しかしながら、前者の 従来の毛髪化粧料では、整髪力が不充分であり、後者の 20 ワックスの微細分散物を含有した毛髪化粧料において *

*は、ワックスのべたつき感、なめらかさに関する改善が 不充分であった。本発明は、前記従来技術の課題に鑑み なされたものであり、その目的は、整髪力に優れるだけ でなく、べたつき感が少なく、かつ毛襞になめらかさ、 くし通りのよさを付与することができる毛髪化粧料を提 供することにある。

[0004]

【課題を解決するための手段】前記目的を達成するため に本発明者らが鋭意検討を行ったところ、ワックスの微 袖、炭化水素油などの袖分を可溶化、乳化、溶解したも、10、粒子と、特定のシリル化ペプチドを含有する毛襞化粧料 は、整髪力に優れ、毛髪のなめらかさ、べたつき感のな さ、くし通りの食さに関し、優れた特徴を持つことを見 いだし、本発明を完成するに至った。

> 【0005】すなわち、本発明の毛襞化粧料は、常温で 固体ないし半固体のワックスを含むワックス微粒子と、 下記一般式(I) または(II) で表されるアミノ酸側鎖 のアミノ基を含むペプチドのアミノ基にケイ素原子をた だ一つ含む官能量が共有結合したシリル化ペプチドの一 種または二種以上を含有することを特徴とする。

一般式(1):

[(k4)

[(£3] R5 R2 R'-Si-(CH₂),-(NH-CH-CO),-(NH-CH-CO),-0H R3 R2 ··· (I) R'-Si-(CHe) s-NH R3

[式中、R1、R1、R1 は炭素数1~3のアルキル基ま たは水酸基を示し、これらのR*、R*、R*はすべて 同じでもよく、また異なっていてもよい。R1 は側鎖の 末端にアミノ墓を有する塩基性アミノ酸の末端アミノ基 を除く残基を示し、R'はR'以外のアミノ酸側鎖を示 U. Bは1または3で、mは0~200、nは0~20※

※0. m+nは1~200である。 (ただし、mおよびn はアミノ酸の数を示すのみで、アミノ酸配列の順序を示 すものではない)]で表されるシリル化ペプチド。 一般式(II):

R3 R^2 R'-Si-(CH2),-0-CH2-CH-CH2-(NH-CH-CO),-(NH-CH-CO),-(NH-CH-CO) Rª R' OH R2 ... (11) -Si-(CH₂)₈-0-CH₂-CH-CH₂-NH 1 R3 OH

[式中、R1、R1 R1 は炭素数1~3のアルキル基 または水酸基を示し、これらのR*、R*、R*はすべ て同じでもよく、また異なっていてもよい。R*は側鎖 の末端にアミノ墓を有する塩基性アミノ酸の末端アミノ 基を除く残基を示し、R'はR'以外のアミノ酸側鎖を 示し、βは1または3で、mは0~200、nは0~2 00. m+nは1~200である(ただし、mおよびn はアミノ酸の数を示すのみで、アミノ酸配列の順序を示 すものではない)]で表されるシリル化ペプチド。ま た。本発明の毛髪化粧料においては、界面活性剤とし て、両性界面活性剤および/または半極性界面活性剤 と、非イオン性界面活性剤を含むことが好適である。ま た。本発明の毛髪化粧料においては、シリル化ペプチド の配合置が、組成物全体に対して、0.01~30重置 %であることが好適である。また、本発明の毛襞化粧料 においては、ワックス/シリル化ペプチドの配合重量比 がり、5~1500であることが好適である。また、本 発明の毛髪化粧料においては、ワックスの微細分散物を 調製後、シリル化ペプチドを添加する製造方法が好適で ある。また、上記毛髪化粧料の製造方法においては、用 20 いられるワックス微細分散物中の全非イオン性界面活性 剤の加重平均したHLBは6~15であることが好適で ある。また、上記毛髪化粧料の製造方法においては、用 いられるワックス微細分散物中の両性界面活性剤/〈両 性界面活性剤+非イオン性界面活性剤)の配合重量比が 0. 03~0. 5であることが好適である。

[0006]

【発明の実施の形態】以下、本発明の実施形態をさらに 詳細に説明する。本発明は、ワックスの微細分散物と上 記シリル化ペプチドとを必須構成成分とする毛髪化粧料 30 る。 である。そこで、本発明に用いられるワックスの微細分 散物とシリル化ペプチドの各々の詳細について説明する こととする。

【0007】<ワックスの微細分散物>化粧料における ワックスを微細分散させる従来技術としては、例えば特 関平3-2112、特関平4-230616、特開平5 -220383、特闘平7-173025号などに示さ れるものがある。しかしながら、これらに示されている ものは、非イオン系又はアニオン系。あるいはカチオン 系界面活性剤を用いて微細分散物を調製するものであ り、非イオン性界面活性剤では、皮膚刺激等安全性は良 好なものの、温度により、系の目しBが変化し、経時安 定性が損なわれる欠点がある。

【0008】また、非イオン性界面活性剤とアニオン界 面活性剤との組合せやアニオン界面活性剤単独、あるい はカチオン性界面活性剤単独で微細分散物を調製する場 台においては、温度安定性は向上するものの、人によっ ては皮膚刺激等に対して問題が生じることが考えられ る。下記に記載するワックスの微細分散物は、広い温度 ある。以下ワックスの微細分散物の各成分について記載 する.

【0009】<u>固形ワックス</u>

(4)

本発明においてワックスとは常温にて固形の袖分を意味 し、具体的にはミツロウ、キャンデリラロウ、綿ロウ、 カルナウバロウ、ベイベリーロウ、イボタロウ、鯨口 **ウ、モンタンロウ、ヌカロウ、ラフリン、カボックロ** ウ、モクロウ、酢酸ラノリン、液状ラノリン、サトウキ ピロウ、ラフリン脂肪酸イソプロピル、ラウリン酸ヘキ 10 シル、還元ラノリン、ホホバロウ、硬質ラノリン。セラ ックロウ、ビースワックス。マイクログリスリンワック ス、パラフィンワックス、POEラフリンアルコールエー テル、PCEラノリンアルコールアセテート、PCEコレステ ロールエーテル。ラノリン脂肪酸ポリエチレングリコー ル、脂肪酸グリセリド、硬化ビマシ油、ワセリン、PCE 水素添加ラノリンアルコールエーテル等がある。なお、 これらのワックスは混合して用いることが可能であり、 他の固形状あるいは液状油分などを混合しても常温にお いて固形である範囲で使用可能である。

- 【0010】このような油性成分としては、次のような ものが挙げられる。液体油脂としては、アボガド油、ツ バキ油、タートル油、マカデミアナッツ油、トウモロコ シ油、ミンク油、オリーブ油、ナタネ油、卵黄油、ゴマ 袖、パーシック油、小麦胚芽油、サザンカ油、ヒマシ 袖、アマニ袖、サフラワー油、綿実油、エノ袖、大豆 袖、落花生袖、茶寒袖、カヤ袖、コメヌカ袖、シナギリ 油、日本キリ油、ホホバ油、胚芽油、トリグリセリン、 トリオクタン酸グリセリン、テトラオクタン酸ペンタエ リスリット、トリインパルミチン酸グリセリン等があ

【0011】固体油脂としては、カカオ脂、ヤシ油、硬 化ヤシ油、パーム油、パーム核油、モクロウ核油、硬化 袖等がある。炭化水素油としては、流動パラフィン、オ ゾケライト、スクワレン、プリスタン、パラフィン、ス クワラン等がある。

【0012】非イオン性界面活性剤

本発明において非イオン性界面活性剤が必須であり、好 適な非イオン性界面活性剤の目LBは6~15、特に好 適なHLBは?~14である。このような非イオン性界 40 面活性剤としては、POEソルビタンモノオレエート、 POEソルビタンモノステアレート、POEソルビタン アトラオレエート等のPOEソルビタン脂肪酸エステル 類、POEソルビットモノラウレート、POEソルビッ トモノオレエート、POEソルビットペンタオレエー ト、POEソルビットモノステアレートなどのPOEソ ルビット脂肪酸エステル類。POEグリセリンモノステ アレート、POEグリセリンモノイソステアレート、P OEグリセリントリイソステアレートなどのPOEグリ セリン脂肪酸エステル類、POEモノオレエート、PO 範囲で安定であり、かつ皮膚刺激がより少ない組成物で「50」Eジステアレート、POEジオレエート、ジステアリン

(5) 特闘平11-286417

酸エチレングリコールなどのPOE脂肪酸エステル類、 POEラウリルエーテル、POEオレイルエーテル、P OEステアリルエーテル、POEベヘニルエーテル、P OE2ーオクチルドデシルエーテル、POEコレスタン ールエーテル等のPOEアルキルエーテル類、POEオ クチルフェニルエーテル、POEノニルフェニルエーテ ル、POEジノニルフェニルエーテル等のPOEアルキ ルフェニルエーテル類、ブルロニックなどのブルロニッ ク類、テトロニック等のテトラPOE・テトラPOPエ チレンジアミン縮合物類、POEヒマシ油、POE硬化 10 ヒマシ油、POE硬化ヒマシ油モノイソステアレート、 POE硬化ヒマシ柚トリイソステアレート、POE硬化 ヒマシ油モノビログルタミン酸モノイソステアリン酸ジ エステル、POE硬化ヒマシ抽マレイン酸などのPOE ヒマシ油硬化ヒマシ油誘導体、POEソルビットミツロ ウ等のPOEミツロウ・ラノリン誘導体、ヤシ油脂肪酸 ジエタノールアミド、ラウリン酸モノエタノールアミ ド、脂肪酸イソプロパノールアミドなどのアルカノール アミド、POEプロピレングリコール脂肪酸エステル、 肪酸エステル、POEノニルフュニルホルムアルデヒド 縮合物、アルキルエトキシジメチルアミンオキシド、ト リオレイルリン酸などが挙げられる。

【0013】また、非イオン性界面活性剤として、ポリ オキシエチレンポリオキシプロピレンアルキルエーテル を用いると、同じオキシエチレン鎖長のポリオキシエチ レンアルキルエーテルと比較して、調製されたワックス 微細分散物の経時安定性がよく、経時で微細粒子の経集 等による外観の変化(透明性の低下)や分散粒子のクリ ーミングが改善されるのでより好適である。上記ポリオ※30

* キシエチレンポリオキシプロピレンアルキルエーテルと しては、 [125] CH:

R (OCH2CH2), (OCH1CH), OH

および/または [fk6] CH3

R (OCH2CH), (OCH2CH2), OH

《ただし、Rは炭素数12~24のアルキル基またはア ルケニル基を表し、mは5≤m≤30 nは0<n≤5 の範囲にある) で衰されるものが好適である。そして、 このようなポリオキシエチレンポリオキシプロピレンア ルキルエーテルとしては、例えば、上記m、nの値が前 記範囲にあるPOE・POPセチルエーテル、POE・ POEアルキルアミン、POE脂肪酸アミド、ショ糖脂 20 POPベヘニルエーテル、POE・POP2ーデシルテ トラデシルエーテル、POE・POPモノブチルエーテ ル、POE・POP水添ラノリン、POE・POPグリ セリンエーテルなどが挙げられる。

> 【①①14】両性界面活性剤および半極性界面活性剤 本発明において両性界面活性剤としては下記一般式 (1)~(5)で示したものが、半極性界面活性剤とし ては下記一般式(6)で示したものが例示される。 **一般式(1):** 【化7】

(CH₂)₄CH₃ ... (1) $R_1-C-NH(CH_2)_P-N^+-CH_2COO^-$ (CH₂)₀CH₈

で表されるアミドベタイン型両性界面活性剤(市販品と ※一般式(2): してレポン2000 (三洋化成株式会社製)、アノンB [(£8]

DF (日本油脂株式会社製)などが挙げられる)。 X40

で表されるアミドスルホベタイン型両性界面活性剤(市 販品としてロンザイン-CS(ロンザ社製)、ミラタイ ンCBS (ミラノール社談) などが挙げられる)。

【0015】一般式(3): [fk9]

で表される第三級アミンオキサイド型半極性界面活性剤 (市販品としてユニセーフA-LM(日本油脂株式会社 製)、ワンダミンOX-100(新日本株式会社製)な どが挙げられる)。

 $R_3 - N \rightarrow O$

CH:

【0017】ただし、一般式(1)~(6)で、R.は 平均炭素原子数9~21のアルキル基またはアルケニル 基が好ましく。より好ましくは平均炭素原子数11~1 平均炭素原子数11ないし13のアルキル基またはアル ケニル基である。平均炭素原子数が9未満では額水性が 強すぎ、一方21を越えると水への溶解性が悪くなる。 R₂及びR₃は平均炭素原子数10ないし18のアルキル 基またはアルケニル基を表す。pは2~4の整数。qは 0~3の整数。sは1または2の整数を表す。本発明に おいては、これらの両性界面活性削及び/または半極性 界面活性剤のうち任意の一種または二種以上が選ばれて 用いられる。

【0018】水系分散媒

本発明において、微細ワックス粒は水系分散媒中に分散 されることが好ましく、この水系分散媒としては、水を 単独で、或いは、水とエタノール、グリセリン、ポリエ チレングリコール、プロピレングリコール、ジプロピレ ングリコール、1,3ープタンジオール、キシリトー ル、ソルビトール、マルチトール、コンドロイチン硫 酸、ヒアルロン酸、ムコイチン硫酸、カロニン酸、アテ 7のアルキル基またはアルケニル基。 さらに好ましくは 40 ロコラーゲン。コレステリルー12-ヒドロキシステア レート、乳酸ナトリウム、胆汁酸塩、d!-ピロリドン カルボン酸塩、短鎖可溶性コラーゲン、ジグリセリン (EO) PO付鮑物、イザヨイバラ抽出液、セイヨウノ コギリソウ抽出液、メリロート抽出液等が挙げられる。 【0019】微細分散物の調製 まず、本発明者らは下記のような試験を行い、ワックス の微細分散組成物の調製を試みた。 [0020] 【表1】

... (6)

50

<u>11</u>	(7)					特闘平11-28641 12				
試験例	1	2	3	4	5	6	7	8	9	-
										•
塩化ステアワルジメチルペンジルアンモニウ	¼ 1 5	_	_	_	5	_	_	10	_	
アニオン性界面活性剤										
ラウリル硫酸ナトリウム	_	15	_	-	_	5	_	_	10	
非イオン性界面活性剤										
POE(10) \(\Libe\tau - 7\rh	_	_	15	_	10	10	10	_	_	
両性界面活性剤										
うがゆりょうかたと酢酸ペッイン	-	-	-	15	-	-	5	5	5	
ーーーーーーー ワックス										•
キャンデリラワックス	19	10	19	10	19	19	10	10	10	
イオン交換水	75	75	75	75	75	75	?5	75	75	
——————————— 外觀	白酒		 白瀬	白酒	白海		透明		——— 白酒	

【0021】<製法>イオン交換水に前記非イオン性界 *化状態を検討した。 面活性剤及び両性界面活性剤を水に溶解し、80~90 20 <基本処方1> Cに創熱してキャンデリラワックスを添加し、1時間ブ ロベラ鎖控する。その後、氷冷し、組成物を得る。 【0022】 <結果>上記表1より明らかなように、カ チオン性界面活性剤、アニオン性界面活性剤、非イオン 性界面活性剤。両性界面活性剤ともに、各単独では乳化 組成物が白襴する傾向にあり、安定性も好ましくない (試験例1~4)。また、カチオン性乃至アニオン性界 面活性剤と非イオン性界面活性剤を組み合わせた場合 (試験例5,6)、あるいはカチオン性乃至アニオン性 界面活性剤と両性界面活性剤を組み合わせた場合(試験 30 例8、9)にも同様である。しかしながら、非イオン性 界面活性剤と両性界面活性剤を組み合わせた場合(試験 例?)には、乳化組成物の外観が透明となり、ワックス の微細分散組成物が得られたことが示唆される。動的光 散乱法による測定の結果。この微細分散物の粒子径は約 30 amであった。

【0023】非イオン性界面活性剤の検討 次に本発明者らは非イオン性界面活性剤の至適HLBに ついて検討を進めた。すなわち、下記組成を基本処方 に、非イオン性界面活性剤のHLBを変化させてその乳*40

く音を処カリン	
キャンデリラワックス	10%
アミドベタイン型両性界面活性剤	5%
非イオン性界面括性剤	10%
イオン交換水	残郁
合計	100%

〈両性界面活性剤/〈両性界面活性剤+非イオン性界面 活性剤)の配合重量比=約(). 33)

<基本処方2>

サヤンエリフソツクス	10%
アミドベタイン型両性界面活性剤	1. 5%
非イオン性界面活性剤	13.5%
イオン交換水	残郁
代合	100%

《両性界面活性剤/《両性界面活性剤+非イオン性界面 活性剤)の配合重量比=(). 1) 結果を次の表2に示す。

[0024]

【表2】

界面活性剤組成	HLB	乳化状態	基本处方
POE(5)A' A144-7# 10%	5	分離	1
POE(3)3177/M=7% 6%	6		1
POE(10) ^ ^=kx=7d 4%			
POE(3)357984-78 4%	7	 半透明な一液相	 1
POE (10) \(^\ \=\b*\-7\b\ 6\%			

13	(8)		特闘平11-2864 <u>1</u> 7 14
POE(3)377941-74 2% POE(10)4" 4=41-74 8%	8	透明な一液相	1
POE(10)^* ^=\$2=7\$* 10%.	9	透明な一液相	1
POE(10)^* \=\k1=7k = 9.25% . POE(50)999k4=7k = 0.75%	10		1
POE(10)^^ ^=b==7b 8.25% POE(50)999b==7b 1.75%	1 1	半透明な一液相	1
POE(15) \$1-164-76 13.5%	12	透明な一液相	2
POE(20)^/ ^=##=7# 13.5%	13	 透明な一液相	2
POE(20)^\^\^=k1=7#\\\\6.75\\\\\POE(30)^\^\^=k1=7#\\\\6.75\\\\\\	14	半透明な一液相	2
POE(30)\^'\=\b1=74' 13.5%	15	クリーム状 	2

【0025】前記表より明らかなように、両性界面活性 剤/ (両性界面活性剤+非イオン性界面活性剤) の重置 此が約0.33または0.1においては、非イオン性界 面活性剤のHLBが6~15で均一な乳化系の形成が可 能であるが、特にHLBが7~14で半透明乃至適明な 一液钼が形成される。従って、本発明のワックス微細分 散物においては、非イオン性界面活性剤のHLBは6~* 【表3】

***15 特に半遠明、透明系を得るためには7~14であ** ることが理解される。

【0026】次に、本発明者らは非イオン性界面活性剤 の種類と分散状態について検討を進めた。まず、基本処 方1の組成における結果を次に示す。

[0027]

HLB:	5	6	7	8	9	10	11
POE直鎖脂肪酸							
C12(3094)		Δ			0	0	
		n=3			n=5	n=7	
C16(tf#)			Δ		0		0
			n=5		n=7		n=9
C18(35794)			Δ		0	Δ	
			n=6		n=8	n=10	
C18(41/11)				Δ	0	Δ	
				n=6	n=8	n=10	
C20(794#)	×				0		
	n=3				n=10		
C33(V, V=k)	×				0		
	n=5				n= <u>1</u> 0		
CE分歧脂肪酸							
C18((237794)			Δ			0	
			n=5			n=10	
C20(XYFAF f 54)						0	
						n=10	

(9) **特関平11-286417** 15 C24(デジルナトラデジル) 0 Δ n=10 n=15

> (n:POE付舶をル数) * 概ねHLBが9~11で透明な一液钼を形成し得ること

【0028】なお、前記表において、〇は透明な一液相 を形成した状態を意味し、△は半透明乃至均一なクリー ム状を、×は分離をそれぞれ衰す。上記衰より、基本処 方1.すなわち、両性界面活性剤/(両性界面活性剤+ 非イオン性界面活性剤〉の重量比が約り、33において は、各非イオン性界面活性剤を単独で用いた場合には、*10 【表4】

が理解される。つぎに、非イオン性界面活性剤の種類と 分散状態について、基本処方2の組成における結果を次 に示す。 [0029]

HLB:	12	1 3	14	1 5	
POS直鎖脂肪酸					
C12(5594)		0			
		n=15			
C16(tf#)					
C <u>18(3779</u> &)	0		Δ		
CTO(x) (Am)	n=15		n=20		
C18(XVIV)	0		11-20		
420(11)	n=15				
C29(794A)		0			
		n=18			
C22(A) A=#)		0		Δ	
		n=20		n=30	
POE分岐脂肪酸					
C18(1737794)	0				
•	n=15				
C29(1//f4h* f* 5/4)	0 (0			
	n=16	n=20			
CZ4(デシルテトタデンル	9 O		Δ		

n=15

n=20

【0030】なお、前記表において、○は透明な一液相 を形成した状態を意味し、△は半透明乃至均一なクリー ム状を、×は分離をそれぞれ表す。上記表より、基本処 方2.すなわち、両性界面活性剤/(両性界面活性剤+ 非イオン性界面活性剤)の重置比が約り、1において は、各非イオン性界面活性剤を単独で用いた場合には、 機ねHLBが12~13で遠明な一液钼を形成し得るこ とが理解される。したがって、前記表3~4をまとめる と、非イオン性界面活性剤の至適なHLB値は界面活性 剤の重量比によって異なるが、その至適目LBは概ね6 ~15ということができる。また、前記表2を参酌する と、複数の非イオン性界面活性剤を組み合わせて用いる ことも可能であり、そのときのHLBは加重平均に依存 する.

(n:POE付加モル数)

【0031】さらに、本発明者らはPOEコレステリ ル、POEグリセリル、POE硬化ビマシ抽等について 検討を行ったが、これらの多鎖型非イオン性界面活性剤 40 単独では、透明な一液相を調製することは困難であっ た。無論、これらの多鎖型非イオン性界面活性剤にあっ ても他の非イオン性界面活性剤との組み合わせにより好 適な分散系を得ることは可能であるが、特にPOE直鎖 乃至POE分岐脂肪酸エーテルが好適に用いられる。 【0032】両性界面活性剤と非イオン性界面活性剤の 次に本発明者らは両性界面活性剤と非イオン性界面活性

剤との相関について検討を進めた。すなわち、下記基本 処方に基づき、アミドベタイン型両性界面活性剤(商品 50 名レボン2000SF)、非イオン性界面活性剤 (PO (10)

特闘平11-286417

18

17 E(10)ペペニルエーテル)の配合比、配合量を変化さ せてワックス分散系を調製した。

<基本処方3>

カルナウバロウ 10% アミドペタイン型両性界面活性剤 X% 非イオン性界面活性剤 Y% イオン交換水 残郁 合計 100%

【0033】結果を図1に示す。同図より明らかなよう に、非イオン性界面活性剤としてHLB9のPOE(1) ①)ベヘニルエーテルを用いた場合、界面活性剤比=両 性界面活性剤/(両性界面活性剤+非イオン性界面活性) 剤)は(0.3付近のところが極めて良好な比として存在) するが、その比の範囲は(両性界面活性剤+非イオン性) 界面活性剤)の量が増加するにつればくなる傾向にあ る。なお、当然のことながら、非イオン性界面活性剤の HLB値を変化させることにより好ましい界面活性剤化 は異なる。そこで、図1に同様な組成で非イオン性界面 活性剤としてHLB13のPOE(20)ペヘニルエーテ ルを用いた場合の結果を図2に示す。同図より明らかな 29 ⑤・・・皮膚刺激性が非常に少ない - 卵白アルブミン変 ように、非イオン性界面活性剤としてHLB13のPO E(20)べヘニルエーテルを用いた場合、界面活性剤比 = 両性界面活性剤/(両性界面活性剤+非イオン性界面 活性剤)は(). 1付近のところが極めて良好な比として 存在するが、その比の範囲は概ね()。()4~()。17と いえる。また、非イオン性界面活性剤としてHLB12 のPOE(15)ベヘニルエーテルを用いた場合の結果を 図3に、HLB15のPOE(30)ベヘニルエーテルを 用いた場合の結果を図4に示す。前記結果からわかるよ うに、非イオン性界面活性剤のHLBにより界面活性剤※30

*比=両性界面活性剤/(両性界面活性剤+非イオン性界 面活性剤) は異なるが、概ね(). ()3~(). 5が好まし い。0.03未満では、系への非イオン性界面活性剤の 寄与が大きくなり、温度安定性が損なわれる。一方、 0.5を超えると、ワックスの微細分散物は得られにく くなる。

【0034】次に本発明者らは、安全性および安定性に ついて検討した。

安全性

10 安全性については卵白アルブミン変性率から評価した。 <試験方法>水系高速液体クロマトグラフィを利用し、 卵白アルブミンp目緩衝溶媒に、試料濃度1%になるよ うに試料を加えた場合の、卵白アルブミン変性率220 mmの吸収ピークを用いて測定した。

 $[(Ho-Hs)/Ho]\times 100$

Ho:卵白アルブミンの220mi吸収ビークの高さ 員s:卵白アルブミン緩衝溶媒に試料を加えた時の22 Omo吸収ピークの高さ評価は以下の4段階評価で行っ

性率30%未満

〇・・・皮膚刺激性が少ない一卵白アルブミン変性率3 0%以上60%未満

△・・ 皮膚刺激性が中程度-卵白アルブミン変性率6 0%以上80%未満。 ×・・・皮膚刺激性が強いー 卵白アルブミン変性率80%以上

【0035】結果を表5に示す。

【表5】

界面活性剤 評価 ドデシル硫酸ナトリウム (アニオン性) Δ ラウリルジメチルアンモニウムクロリド (カチオン健) × POE(20)ベヘニルエーテル (非イオン性) ⊚ レボン2000SF(両性) 0 ドデシル硫酸ナトリウム+ POE(20)ベヘニルエーテル 0 $\{1:1\}$ レポン2000SF+POE(20)ベヘニルエーテル **©** (1:1)

(レボン2000SF;三洋化成社製、アミノベタイン型両性界面活性剤)

【10036】上記の結果から両性界面活性剤と非イオン 性界面活性剤の組合せは、非イオン性界面活性剤と同じ ベルで皮膚刺激性が少なく安全性が高い。従って、両界 面活性剤を併用したワックスの微細分散物は安全性が高 いことが示唆される。

【0037】安定性

*C. 1週間の経時安定性を評価した。結果を表6に示 す。

<華本処方4>

キャンデリラワックス 10% 界面活性剤 10~20% イオン交換水 残部

以下に示す処方でワックスの微細分散物を調製し、50 50 【0038】

(11)

特闘平11-286417 29

【表6】

処 方 2 3 6 キャンデリラワックス 10 10 1.0 10 1.0 10 POE(3)ステアリルエーテル 5 7 10POE(10)ベヘニルエーテル 1.0 15 6.5 POE(26)ベヘニルエーテル ļ RŒ(40)硬化ヒマシ油 1.0 1.0 6 レポン2000SF 10 (有効分約30%) ソフダゾリンしHL-SF 10 (有効分約30%) イオン交換水 残部 残部 残部 残部 残部 残部 界面活性剂置比 両性/(両性+非イオン性) 0.020 0.017 0.16 0.32 安定性 (50°C. 1週間) 分離 分離 分離 変化 変化

(ソフダゾリンLHL-SF:川研ファインケミカル社製。イミダゾリニウム型 両性界面活性剤)

【0039】上記表6より明らかなように、非イオン性界面活性剤単独および界面活性剤此(前記規定)が0.03未満では、経時安定性は損なわれる。一方、好ましい界面活性剤比中の両性界面活性剤と非イオン性界面活性剤の組合せでは安定性は良好であった。

19

*【0040】<シリル化ペプチド>上記一般式(1)で 表されるシリル化ペプチドは、例えば、下記の一般式 (III): 【化13】

$$\begin{array}{c|c}
R^{4} - Si - (CH_{2}) - X & \cdots (III) \\
R^{9} & & & \end{array}$$

[武中、R°、R'、R'は、炭素数1~3のアルキル基、炭素数1~3のアルコキシ基、水酸基またはハロゲン原子を示し、これらの R°、R'、R'はすべて同じでもよく、また異なっていてもよい。aは1または3※

※で、XはC! Br、F. Iなどのハロゲン原子を示す]で表されるシリル化合物と、下記の一般式(Iv): 【化14】

[式中、R* は側鎖の末端にアミノ基を有する塩基性アミノ酸のアミノ基を除く残量を示し、R* はR* 以外のアミノ酸の側鎖を示し、mは $0\sim200$ 、nは $0\sim200$ 、m+nは $1\sim200$ である]で表されるペプチド類

とを確台反応させることによって得られる。また、一般 式 (II) 衰されるシリル化ペプチドは、例えば、下記の 一般式 (V): 【化 15】

[式中、 R^* 、 R^* 」 R^* は炭素数 $1 \sim 3$ のアルキル 基、炭素数1~3のアルコキシ基、水酸基またはハロゲ でもよく、また異なっていてもよい。aは1または3を 示す]で表されるシリル化合物と、上記の一般式 (IV) で表されるペプチド類とを縮合反応させることによって

【0041】シリル化ペプチドの特性

一般式(1)で表されるシリル化ペプテドや一般式(1 I) で表されるシリル化ペプチドは、その化学構造式か らも明らかなように、それぞれ一般式 (III) で表され るシリル化合物や一般式(V)で表されるシリル化合物 に基づくケイ素原子を含むシリル官能基部分と、一般式 20 (IV) で表されるペプチド類に基づくペプチド部分を有 するので、これを毛髪化粧料に配合すると、シリル官能 基部分の有する優れた伸展性、摩擦低減性、變や光沢の 付与作用、撥水性の付与作用などと、ペプチド部分の有 する毛髪への収着作用、それに伴う毛髪のボリュームア ップ、ハリの付与、造膜による保護作用、保湿作用など を同時に発揮させることができる。しかも、ペプチド類 は頻傷毛への収着性が良いので、上記シリル化ペプチド は、高分子量のシリコーンでは収着しにくい損傷毛にペ プチド部分を介して、シリル官能基を収着させることが 30 できるので、頻傷毛の感触を改善するとともに、強度の 回復に寄与することができる。

【0042】従って、このシリル化ペプチドを配合して 毛襞化粧料を調整すると、上記シリル化ペプチドが毛髪 に難や濁いを付与し、毛髪をなめらかにし、かつ毛髪の 締通り性などを改善し、技毛、切れ毛の発生を防止する とともに、損傷毛の強度を回復させる。

【0043】また、前記一般式(1)で表されるシリル 化ペプチドや一般式 (II) で表されるシリル化ペプチド は、ペプチド部分に低分子量のシリル官能基が結合した。40 とができなくなり、 $\mathbf{m} + \mathbf{n}$ が上記範囲より大きくなる ものであって、毛髪には道常のペプチドの収着機構で収 着するので、ペプチドを含まない洗浄剤で洗浄すること により、可逆的にシリル化ペプチドを毛髪上から脱者す ることができる.

【0044】一般式(1)で表されるシリル化ペプチド や一般式(II)で表されるシリル化ペプチドにおいて、 R1、R1、R1 を前記のように特定しているのは、一般 式(I)で表されるシリル化ペプチドや一般式(II)で 表されるシリル化ペプチドが、水溶性を有し、水溶性の

めである。 また、aを 1または3と特定しているの は、aが2の場合は、一般式 (III) で表されるシリル ン原子を示し、これらのR*、R*、R*はすべて同じ 10 化合物や一般式(V)で表されるシリル化合物の状態で の保存安定性が悪く、aが3より大きくなると、分子全 体中でシリル官能基部分の占める割合が小さくなり、シ リル官能基の有する性質を充分に発揮できなくなるため

> 【0045】シリル化ペプチドにおけるペプチド部分 一般式(!)で表されるシリル化ペプチドや一般式(I I) で表されるシリル化ペフチドにおいて、R1 は側鎖 の末端にアミノ墓を有する塩基性アミノ酸の末端アミノ 基を除く残基であるが、上記のような側鎖の末端にアミ ノ墓を有する塩基性アミノ酸としては、例えば、リジ ン、アルギニン、ヒドロキシリンなどが挙げられる。ま た、R'はR'以外のアミノ酸の側鎖を示すが、そのよ うなアミノ酸としては、例えば、グルタミン酸。アスパ ラギン酸、アラニン、セリン、トレオニン、バリン、メ チオニン、ロイシン、イソロイシン、チロシン、フェニ ルアラニン、プロリン、ヒドロキシブロリンなどが挙げ ろれる。一般式 (!) で表されるシリル化ペプチドや--般式(II)で表されるシリル化ペプチドにおいて、血は 0~200、好ましくは0より大きく50以下(0<m ≦50)、より好ましくはりより大きく10以下(6< m≤10)であり、nは0~200、好ましくは1~1 00. より好ましくは2~40であり、m+nは1~2 0.0. 好ましくは2~1.00、より好ましくは3~5.0 であるが、これは次の理由によるものである。すなわ ち、mが上記範囲より大きくなると、側鎖のアミノ基に 結合するシリル官能基が増え、ペプチド本来の毛髪への 収着作用が減少し、mが上記範囲より大きくなると、ベ フラド部分に対するシリル官能基部分の割合が小さくな り、シリル官能基部分が有する特性を充分に発揮するこ と、ペプチドとしての毛髪への収着性や浸透性が低分子 置のペプチドに比べて減少する上に 保存中に凝集しや すくなり、保存安定性が低下する。

【0046】なお、上記のm、nやm+nは、理論的に は整骸であるが、ペプチド部分が後述するような加水分 解ペプチドである場合は、該加水分解ペプチドが分子置 の異なるものの混合物として得られるため、測定値は平 均値になる。

【①047】上記一般式(IV)で表されるペプチド類に 毛襞化粧料中での良好な保存安定性を保つようにするた 50 は、アミノ酸、ペプチド、アミノ酸またはペプチドのア

ラニン、グリシン、バリン、ロイシン、イソロイシン、 プロリン、フェニルアラニン、チロリン、セリン、トレ オニン、メチオニン、アルギニン、ヒスチジン、リジ ン、アスパラギン、アスパラギン酸、グルタミン、グル タミン酸、シスチン、システイン、 システイン酸、ト リプトファン、ヒドロキシプロリン、ヒドロキシリシ ン、〇一ホスホセリン、シトルリンなどが挙げられる。 上記ペプチドは、天然ペプチド、合成ペプチド、タンパ ク質(蛋白質)を酸、アルカリまたは酵素で部分加水分 解して得られる加水分解ペプチドなどである。

【①①48】天然ペプチドとしては、倒えば、グルタチ オン、バシトラシンA、インシュリン、グルカゴン、オ キシトシン、バソプレシンなどが挙げられ、合成ペプチ 下としては、例えば、ポリグリシン、ポリリジン、ポリ グルタミン酸。ポリセリンなどが挙げられる。

【0049】觚水分解ペプチドとしては、例えば、コラ ーゲン(その変性物であるゼラチンを含む)、ケラチ ン、絹フィブロイン、セリシン、カゼイン、コンキオリ ン、エラスチン、鶏、あひるなどの卵の卵黄タンパク、 コシタンパク、米(米微) タンパク、ジャガイモタンパ りなどの動植物由来のタンパク、あるいは、サッカロミ セス膜、カンディタ属、エンドミコプシス層の酵母菌 や、いわゆるビール酵母、清酒酵母といわれる酵母菌よ り分解した酵母タンパク、キノコ類(担子菌)より抽出 タンパク、クロレラより分離したタンパクなどの微生物 由来のタンパクを酸、アルカリまたは酵素で部分的に加 水分解して得られるペプチドなどが挙げられる。

【0050】上記アミン酸またはペプチドのエステルと における炭素数1~20の炭化水素アルコールとのエス テル、例えば、メチルエステル、エチルエステル、プロ ピルエステル、イソプロピルエステル、ラウリルエステ ル、セチルエステル、2-エチルヘキシルエステル、2 - ヘキシルデシルエステル、ステアリルエステルなどが 挙げられる。

【0051】シリル化ペプチドの合成

上記一般式(I)で豪されるシリル化ペプチドや一般式 (II) で表されるシリル化合物や一般式 (V) で表され を接触反応させて得られたものであるが、一般式(III I) で表されるシリル化合物や一般式(V)で表される シリル化合物は、シランカップリング剤として市販され ているものを使用することができる。そのようなシラン カップリング剤としては、例えば、東芝シリコーン(株) 製のTSL8390, TSL8219. TSL839 5. TSL8326, TSL8325. TSL832 O. TSL8355、TSL8350 (いずれも商品) 名) . 日本ユニカー(株)製のSH6()4()、SH6()7 6 (いずれも商品名)、信越シリコーン(株)製のKMB 50 た。7.5%より多くなると、疎水性が増して親水性が減

403、KMB402, KMB703 (いずれも商品 名) などが挙げられる。

【0052】上記一般式 (III) で衰されるシリル化合 物や一般式(V)で表されるシリル化合物と一般式(I V) で表されるペプチド類との反応は、例えば、まず、 シリル化合物を30~50°Cの水中で5~20分間撹拌 して觚水分解することにより、ケイ素原子の結合するア ルコキシ基やハロゲン原子を水酸基に変換した後。この 水酸基化したシリル化合物を一般式(IV)で表されるペ 10 プチド類の恣波に満下し、両者を接触させることによっ て行われる。

【0053】上記反応に際して、ペプチド類は30~5 ①重量%程度の水溶液にするのが好ましく、水酸塩化し たシリル化合物の適下は30分~5時間で終了するのが 好ましい。

【0054】一般式(III)で表されるシリル化合物を 用いる場合は、反応時、反応によってハロゲン化水素が 生成して反応後のp月が低下するので、反応と同時に水 酸化ナトリウム、水酸化カリウムなどのアルカリ溶液を 卵白タンパク、大豆タンパク、小麦タンパク、トウモロ 20 裔下して、反応系内のpHを $8\sim11$ 、特に、 $9\sim10$ に保つことが好ましい。また、一般式 (V) で表される シリル化合物を用いる場合は、反応によるDHの低下は 生じないが、反応は塩基性で進行するので、ペプチド溶 液のpHを8~11、特に、9~10にしておくことが 好ましい。

【0055】反応は鴬温でも進行するが、温度は高くな るほど反応速度は速くなる。しかし、p目が高い状態で 温度が高くなると、シリル化合物の顔水分解が促進され るため、高くても70°C以下にすることが好ましく、特 しては、上記アミノ酸またはペプチドのカルボキシル基 30 に4.0~6.0℃で行うのが好ましい。反応の進行と終了 は、ファン・スレーク (Van Slyke) 法によ り、反応中のペプチド類のアミノ騰窒素量を測定するこ とによって確認することができる。反応終了後、反応液 は中和した後、適宜濃縮して、イオン交換樹脂、透析 膜、電気透析、ゲル濾過、限外濾過などによって精製 し、液体のまま、あるいは、粉末化して毛髪化粧料の調 整に供される。上記一般式(!)で表されるシリル化べ プチドにおいて、ペプチドのアミノ基へのシリル官能基 (すなわち、ケイ素原子をただ一つ含む官能基)の導入 るシリル化合物と一般式 (IV) で表されるペプチド類と 40 率は50%以上85%以下が好ましい。シリル官能基の 導入率が50%より少ない場合は、シリル化合物に基づ く特性が充分に発揮されないおそれがあり、また、85 %より多くなると、鯨水性が増して額水性が減少するお それがある。

> 【0056】また、一般式(II)で表されるシリル化べ プチドにおいて、ペプチドのアミノ基へのシリル官能基 の導入率は5.0%以上7.5%以下が好ましい。シリル官 能量の導入率が5.0%より少ない場合は、シリル化合物 に基づく特性が充分に発揮されないおそれがあり、ま

少するおそれがある。一般式(1)で表されるシリル化 ペプチドや一般式(IV)で表されるシリル化ペプチドの 毛襞化粧料への配台費(毛髪化粧料中での含有量)とし ては、0.05~30重量%が好ましく、特に、0.5 ~15重置%がより好ましい。すなわち、シリル化ペプ チドの毛髪化粧料への配合量が、上記範囲より少ない場 台は、毛髪にツヤや湖いを付与したり、毛髪を保護した り、櫛通り性を改善したり、高分子シリコーンの乳化安 定性を向上させる効果が充分に発揮されず、また、シリ ル化ペプチドの毛髪化粧料への配合量が多くなっても、 配合量の増加に伴う効果の増加が認められない上に、配 台重が極端に多くなると、ベトツキを生じるようになる からである。そして、毛襞化粧料への配合に当たって、 上記シリル化ペプチドは単独で用いても良いし、2種以 上を混合して用いても良い。

【0057】つぎに、本発明に用いられるシリル化ペプ チドの台成例について述べる。

<合成例1>加水分解コラーゲン(コラーゲンの加水分 解物で、一般式(IV)(mの平均値=2、nの平均値= 18. m+nの平均値=20)) の30%水溶液50g 20 (アミノ騰窒素の測定によって得られた化学置論的モル 数として10.6ミリモル)に20%水酸化ナトリウム 水溶液を滴下してp目を9.5にし、55℃に加温し た。一方、シリル化剤として、一般式(V)において、 $R^*=CH$, R'=OCH, R'=OCH, T, A=3のシリル化合物2、3g(加水分解コラーゲンのアミ ノ態窒素量に対し、1.0当量)を水に15%水溶液と なるように溶解し、希塩酸でp Hを3.5に調整して、 50℃で15分間撹拌を続け、メトキシ基(-○○員 3) を加水分解して水酸器に変換させた。上記の加水分 30 解コラーゲン溶液を5.5℃で撹拌しながら、その中に、 水酸基に変換したシリル化合物水溶液を30分間かけて 滴下した。滴下終了後、55℃で、さらに5時間攪拌を 織け、反応を完結させた。反応終了後、アミノ態窒素を 測定することにより、シリル官能基の加水分解コラーゲ ンのアミノ騰窒素への導入率を求めたところ、シリル官 能量の導入率は67%であった。反応液を希望酸で中和 した後、電気透析装置で脱塩し、pHを6.5に調整し た後、濃縮して濃度調整を行うことにより、反応生成物 を63ょ得た。

【0058】<合成例2>加水分解小麦タンパク(小麦 タンパクの加水分解物で、一般式(IV)(mの平均値= 1.2、nの平均値=8.8、m+nの平均値=1 (1) の30%水溶液50g(アミノ態窒素の測定によ って得られた化学置論的モル数として15ミリモル)を 20%水酸化ナトリウム水溶液を滴下してpH9.5に し、55℃に加温した。一方、シリル化剤として、一般 式 (V) において、R*=C1、R'=CH, 、R*=C1

チドのアミノ態窒素量に対し、0.9当量)を水に15 %水溶液となるように溶解し、15分間鏡袢を続けてケ イ素原子に直接結合しているCI原子を水酸量に変換さ せた。上記加水分解小麦タンパク水溶液を55℃で機拌 しながら、その中に水酸量に変換したシリル化合物水溶 液を1時間かけて満下した。満下終了後、55℃で、さ ろに5時間幾拌を続けて反応を完結させた。反応液を希 塩酸で中和後、電気透析で脱塩し、濃縮して濃度調整を 行うことにより、反応生成物(シリル化加水分解小麦々 10 ンパク) 濃度が20%の水溶液55gを得た。シリル官 能量の導入率は62%であった。

【0059】<合成例3>加水分解コラーゲンに代え て、加水分解ケラチン(羊毛の加水分解物で、一般式 (IV) (mの平均値=0.6、nの平均値=4.4、m + n の平均値=5))の30%水溶液50g(アミノ感 窒素の測定により得られた化学置論的モル数として、4 2ミリモル)を用い、シリル化剤として、一般式(V) において、R*=CH,、R'=OC2H: R*=OC2 日、で、a=3のシリル化合物を75g(加水分解ケラ チンのアミノ態窒素量に対し、(). 8等置) 用いたほか は、合成例1と同様にして、反応生成物(シリル化加水 分解ケラチン)濃度が20%の水溶液58gを得た。シ リル官能基の導入率は5.9%であり、また、一般式 (Y)で表されるシリル化合物において、ケイ素原子に 直接結合していたエトキシ蟇(OC、H。)は上記反応の 間に水酸基に変換されていた。

【0060】<合成例4>加水分解コラーゲンに代え て、加水分解大豆タンパク(大豆タンパクの加水分解物 で、一般式(IV)(mの平均値= 0、5、nの平均値= - 5. 5、m+nの平均値=6))の30%水溶液50g (アミノ騰窒素の測定によって得られた化学置論的モル 数として、18.4ミリモル)を用い、シリル化剤とし て、一般式(V)において、R°=OCH₂、R'=OC H, R'=OCH,で、a=1のシリル化合物を3.4 g (加水分解大豆タンパクのアミノ態窒素量に対して、 0. 9当費) 用いたほかは、合成例1と同様にして、反 応生成物 (シリル化加水分解大豆タンパク) 濃度が20 %の水溶液53gを得た。シリル官能量の導入率は60 %であり、また。一般式(V)で表されるシリル化合物 (シリル化加水分解コラーゲン)濃度が20%の水溶液 40 において、ケイ素原子に直接結合していたメトキシ基は 上記反応の間に水酸基に変換されていた。

【0061】<合成例5>加水分解コラーゲンに代え て、加水分解酵母タンパク(酵母タンパクの加水分解物 で、一般式 (IV) (mの平均値= 1.2、nの平均値= 6. 8、m+nの平均値=8)) の30%水溶液50g (アミノ騰窒素の測定によって得られた化学置論的モル 数として30ミリモル)を用い、シリル化剤として、-般式 (V) において、R*=CH,、R*=OC,H,、R *= OC, H, で、a = 3のシリル化合物を5、3g(加 で、a=3のシリル化合物3.1g(加水分解小麦ペプ 50 水分解酵母タンパクのアミノ旅宴業量に対して、0.8

28

当量) 用いたほかは、実施例1と同様にして、反応生成 物(シリル化加水分解酵母タンパク) 濃度が20%の水 溶液48gを得た。シリル官能基の導入率は57%であ り、また、一般式(V)で表されるシリル化合物におい て、ケイ素原子に直接結合していたエトキシ基は上記反 応の間に水酸基に置換されていた。

27

【0062】<合成例6>L-リジン塩酸塩10g(分 子量182.6.54.7ミリモル)を100m1の水 に溶解し、20%水酸化ナトリウム水溶液を滴下してp として、一般式 (V) において、R*= OCH。 R'= OCH_a、R^o=OCH_aで、a=3のシリル化合物1 7.8g(L-リジン塩酸塩のアミノ態窒素量に対し、 7当量)を水に15%水溶液となるように溶解し、 希塩酸でp Hを3.5に調整して50℃で15分間機拌 を続け、メトキシ基を加水分解して水酸基に変換させ た。上記しーリジン塩酸塩水溶液を攪拌しながら、その 中に、水酸基に変換したシリル化合物水溶液を30分間 かけて適下した。適下終了後、55°Cで、さらに5時間 鏡針を続けて反応を完結させた。反応終了後、アミノ艦 20 **窒素量を測定することにより、シリル官能基の導入率を** 求めたところ、シリル官能量の導入率は6.5%であり、 ペプチド末端のアミノ基だけでなく。側鎖のアミノ基も 反応していることがわかった。反応液を希塩酸で中和し た後、電気透析装置で脱塩精製し、pHを6、5に調整 した後、濃縮して濃度調整を行うことにより、反応生成 物 (シリル化し-リジン) 濃度が15%の水溶液を11 8 g 得た。

【0063】<合成例7>L-リジン塩酸塩に代えて、 グリシルーレーアラニン10g(分子量146.1、6 30 成物を得る。 8. 4ミリモルル〉を用い、シリル化剤として、一般式 $\{V\}$ において、 $R^* = CH_2$ 、 $R^* = OCH_3$ 、 $R^* = O$ CH, r, a = 1のシリル化合物を13.5g(グリシ ルーレーアラニンのアミノ態窒素量に対し、(). 9当 置)を用いたほかは、台成例6と同様にして、反応生成 物 (シリル化グリシルーレーアラニン) 濃度が15%の 水溶液104gを得た。シリル官能差の導入率は5.5% であり、また。一般式 (V) で表されるシリル化合物に おいて、ケイ素原子に直接結合していたメトキシ基は上 記反応の間に水酸基に変換されていた。

【0064】本発明に用いられるシリル化ペプチドの配 台量は、毛髪化粧料全置中の0.01~30重量%で、 好ましくは0.1~20重量%である。0.01重量% 未満では、シリル化ペプチド由来の配合の効果。すなわ ち、手のべたつきのなさ、なめらかさが得られず、30 重量%を越えると、溶解性の点で配合しにくくなり、句 いも異臭となる。

【0065】なお、本発明の毛髪化粧料には、上記必須 構成成分の他に、目的に応じて本発明の効果を損なわな い量的、質的範囲内で、道常、化粧料に配合される他の 50 【006.9】[手ぐしの通りやすさ]毛襞ストランド(4

油分、他の界面活性剤、セット剤制脂、粘度調製剤、薬 効剤、防腐剤、繋外線吸収剤等を併用することができ る。例えば、シリコーン誘導体(ジメチルポリシロキサ ン、メチルフェニルポリシロキサン、ポリエーテル変性 シリコーン、エポキシ変性シリコーン。フッ素変性シリ コーン、アルコール変性シリコーン。アルキル変性シリ コーン、アルコキシ変性シリコーン)、粘度調製剤とし て、ポリビニルアルコール、カルボキシビニルポリマ ー。カルボキシメチルセルロース、ポリビニルビロリド 目を9.5にし、55℃に加湿した。一方、シリル化剤 10 ン、ヒドロキシエチルセルロース、メチルセルロース等 の高分子化合物。ゼラチン、タラカントガム等の天然ガ ム等、防腐剤として、例えば、バラオキシ安息香酸エス テル、安息香酸、安息香酸ナトリウム、ソルビン酸、ソ ルビン酸カリウム、フェノキシエタノール等が挙げられ る。また、セット剤樹脂としては、例えば、ビニルピロ リドン/酢酸ビニル共重合体、ビニルビロリドン/アル キルアミノアクリレート共重合体、ベタイン化ジアルギ ルアミノアルキルアクリレート共重合体等が挙げられ る。

[0066]

【実施例】次に、本発明の具体的な実施例を示す。な お、配合置はすべて重置%である。本発明の毛髪化粧料 は、前記述べた通り、ワックスの微細分散物と、シリル 化ペプチドの一種または二種以上の両成分を含有するこ とにより、調製される。本発明に用いられるワックスの 微細分散物の調製法は、イオン交換水に前記非イオン性 界面活性剤および両性界面活性剤を水に溶解し、85~ 95°Cに加熱して、前記圖形ワックスを添加し、可溶化 状態となるまでプロペラ捌針する。その後、氷冷し、組

【0067】本発明者らはべたつきがなく、なめらかさ と、くし通りの良さに関して優れた特徴を持つ希髪化粧 料を検討する過程で、以下のような実験をした。そし て、本発明の効果を調べるため以下の毛髪化粧料を調製 し、得られた実施例と比較例あるいは試験例を試料とし 用い、「手のべたつき感」、「手ぐしの通りやすさ」、 「なめらかさ」、「つや」、「鏊髪力」について評価し た。評価方法は、つきの通りである。

【0068】[手のべたつき感]手のひらに試料18をと 40 り、30秒間手でこすった後、手のべたつき感を官能評 価をした。

ワックスの微細分散物のみのものと比較して、大き く改義された

〇:ワックスの微細分散物のみのものと比較して、改善 された

△:ワックスの微細分散物のみのものと比較して、やや 改善された

- : ワックスの微細分散物のみのものと比較して、改善 されなかった、または劣っていた。

(16)

特闘平11-286417

30

g) に試料2gを塗布し、 仰で形を整え、その直後およ び6時間後、12時間後に手ぐしの通りやすさを評価し た。

29

◎: ワックスの微細分散物のみのものと比較して、大き

〇:ワックスの微細分散物のみのものと比較して、改善 された

△:ワックスの微細分散物のみのものと比較して、やや。 改善された

されなかった。または劣っていた。

【0070】[なめらかさ]毛髪ストランド(4g)に試 料2gを塗布し、縛で形を整え、その直後および6時間 後、12時間後に毛髪ストランドのなめらかさを官能評 価した。

◎:ワックスの微細分散物のみのものと比較して、大き く改善された

○:ワックスの微細分散物のみのものと比較して、改善 された

△:ワックスの敵細分散物のみのものと比較して、やや 26 されなかった。または劣っていた。 改善された

- : ワックスの微細分散物のみのものと比較して、改善 されなかった。または劣っていた。

【0071】[つや]毛髪ストランド(4g)に試料2g を塗布し、その直後および3時間後に毛髪ストランドに ついて、変角光度計で入射された光に対する毛襞の反射 光分布を測定することによって毛髪のつやの評価をし た。

* ②:ワックスの微細分散物のみのものと比較して、大き く改善された

〇:ワックスの微細分散物のみのものと比較して、改善

△:ワックスの微細分散物のみのものと比較して、やや 改善された

ニ:ワックスの微細分散物のみのものと比較して、改善 されなかった。または劣っていた。

【0072】[整髪方]毛襞ストランド(4g)に試料2 ー:ワックスの微細分散物のみのものと此較して、改善 10 『堂布し、織で形を整える』次いで、そのストランドに 図5のようにドライヤーで送風し、ストランドの広がり 具合を目視により、評価した。

> ◎: ワックスの微細分散物のみのものと比較して、大き く改善された

> 〇:ワックスの微細分散物のみのものと比較して、改善 された

> △:ワックスの微細分散物のみのものと比較して、やや 改善された

- : ワックスの微細分散物のみのものと比較して、改善

【0073】本発明の構成成分

本発明にかかる構成の組成物を試験例10とし、シリル 化ペプチドの構成を欠いたものを試験例11、ワックス の構成を欠いたものを試験例12とした。なお、評価は 試験例11を基準とした。

[0074]

【表?】

*

セットローション	試験例10	試験例11	試験例12	
	15.0	15.0		
(2) # 984524D2N N=\$1-74(10EQ)	10.0	10.0	10.0	
(3) 2-777 VA-N,N,N-(81 04V4FA				
カルギ キシメチルシーユーイミグ・ブ・リンナトリウム**	5.0	5. 0	5. 0	
(4) イオン交換水	67.8	69.8	82.8	
(5) 台成例1のシリル化ペプチド	1.0	-	1. 0	
(6) 台成例2のシリル化ペプチド	1.0	_	1. 0	
(?) メチルバラベン	0.2	0.2	0. 2	
————————————————————— 李価				
手のべたつき感	0	-	Δ	
手ぐしの通りやすさ				
(直 後)	0	_	0	
(6時間後)	©	_	_	
(12時間後)	0	-	_	
なめらかさ				
(直 後)	0	-	Δ	
(6時間後)	0	_	Δ	
(12時間後)	©	_	_	

	(17)			特期平11-286417
31				32
つや				
(直 後)		•⊚	_	0
(3時間後)		③	-	Δ
整裝力				
(直 後)		©	-	
(6時間後)		©	-	-

*1: [商品名:オバゾリン662N脱塩品-SF,三洋化成(株)製](実分30%、

【①①75】<試験例10の製法>(1)~(3)と(4)の一部を約95℃で撥拌混合し、透明性を帯びた後、氷冷し、ワックスの微細分散物を得、次いで、(4)の残部に(5)~(7)を溶解したものを添加し、セットローションを得た。
<試験例11の製法>(1)~(3)と(4)の一部を約95℃で攪拌し、透明性を帯びた後、氷冷し、ワックスの微細分散物を得、次いで、(4)の残部に(7)を溶解したものを添加し、セットローションを得た。
<試験例12の製法>(4)に(2)、(3)と(5)~(7)を添加し、セットローションを得た。
【①①76】上記の結果より、ワックスの構成を欠いた試験例12は、手のべたつき感のなさ、手ぐしの通りや

すさ、なめらかさの点では、そこそとの使用感が得られ

ることがわかるが、試験例11と比較してはるかに整髪*

16*力に劣っていた。これに対して、本発明のワックスの微細分散物とシリル化ペプチドを配合した模成の試験例1 ①は、手のべたつき感のなさ、手ぐしの通りやすさ、なめらかさ、整髪力すべての点で改善されており。しかもそれらの改善効果が6時間も維持されているのがわかる。さらに、手ぐしの通りやすさ、なめらかさにおいては、改善効果が12時間にわたって維持されていることもわかる。また、本発明にかかる試験例10は、毛髪のつやにも優れた効果がある。 【①077】ワックス/シリル化ペプチドの配合重量

【9077】 ワックス/シリル化ペプチドの配合重査 20 つぎに、シリル化ペプチドの配合置を変えることによっ て、シリル化ペプチドの配合置、並びにワックス/シリ ル化ペプチドの配合重置比の検討を行った。 【0078】 【表8】

セットローション	試験例 13	試験例 14	試験例 15	試験例 16	試験例 17	試験例 18
 1)カルナウバロウ 2)む リオセシュチルン	15.0	15.0	15.0	15.0	15.0	15.0
^ ^ニルューテル(1GEG) 3)ヤシ油脂肪酸アミド	10.0	16.6	19.0	10.0	10.0	10.9
ジノチルフミノ酢酸ペッパン	² 5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0
(4)イオン交換水 (5)合成例 1 の	69.699	69.69	6 9.6	59.7	49,7	39.7
沙配也ペアチド	0.001	0.01	9.1	19.0	20.0	30.0
6)エチルバラベン	0.2	9.2	6.2	6.2	0.2	0.2
7)7x/4>x9/-6	0.1	9. <u>1</u>	9. 1	0.1	0.1	0.1
合重量比						
ワウス/対象化ペナチド	15000	1500	150	1.5	0.75	0.5
 F値	·— ———					
手のべたつき感	Δ	0	0	©	☺	0
手ぐしの通りやすさ	Δ	0	@	0	③	③
なめらかさ	Δ	0	0	0	©	③
つや	Δ	0	0	0	©	0
整襞力	Δ	0	0	0	0	0

#2: 【商品名: レボン2000-SF、三洋化成(株)製】 (実分30%)

```
特関平11-286417
                             (18)
【0079】上記結果より、シリル化ペプチドの好適な
                               *【0080】従来技術との比較
配合量は0.001~30重置%、より好適な配合量は
                                つぎの本発明の実施例1~3、および従来技術の一般的
0.5~20重量%であることがわかる。また、好適な
                                な毛襞のセットを目的としたワックスを配合しない此較
ワックス/シリル化ペプチドの配合重量比は約0.5~
                                例1~3の毛髪化粧料を調製した。
1500であることがわかる。
                                [0081]
          実施例1. セットローション
           (1) カルナウバロウ
                                                 3. 0
           (2) ポリオキシエチレンベへニルエーテル (10EO)
                                                 3. 0
           (3) ヤシ油脂肪酸アミドジメチルアミノ酢酸ベタイン (実分30%) 4.9
             [商品名:レボン2000-SF、三洋化成(株)製]
           (4) イオン交換水
                                                83.7
           (5) 合成例1のシリル化ペプチド
                                                 1. 0
           (6) 合成例5のシリル化ペプチド
                                                 1. 0
           (?) グリセリン
                                                 2. 0
           (8) メチルパラベン
                                                 0.3
           (9) 香料
                                                適量
           (19) エチルアルコール
                                                 1. 0
<製法>(1)~(3)と(4)の一部を約95℃で鏝 20※ 混合物をワックスの微細分散物に添加し、セットローシ
控混合し、透明性を帯びた後、氷冷し、ワックスの微細 ョンを得た。
分散物を得、その後、(4)の残部。(5)~(16)の※
                                [0082]
          実施例2. スタイリングムース
           (1) キャンデリラロウ
                                                  5.
          0
           (2) マイクロクリスタリンワックス
                                                  1.
           (3) ポリオキシエチレンベヘニルエーテル (10EO)
                                                  4.
           (4) 2-527 24-N,N,N-(8) 042454848 45x56)2-125 7 172351704
                                                  9
             [商品名:オバゾリン662N競塩品、東邦化学(株)製]
           (5) イオン交換水
                                                 65.
           (6) プロピレングリコール
                                                 12.
           (7) ヒアルロン酸
                                                  0.
           (8) 合成例3のシリル化ペプチド
                                                  0.
           (9) 合成例5のシリル化ペプチド
                                                  0.
           (10) 合成例6のシリル化ペプチド
                                                  O.
           (11) エチルアルコール
           (12) 紫外線防止剤(オキシベンゾン)
          짬
           (13) 香料
```

```
(19)
                                              特闘平11-286417
              35
                                               36
           (14) 液化石油ガス
                                                10.
<製法>(1)~(4)と(5)の一部を約95℃で鏝。 *ース原液とし、次いで、この原液をエアゾール用缶に添
拌混合し、透明性を帯びた後、氷冷し、ワックスの微細
                                加し、弁をした後、頸射剤液化石油ガスを充填し、スタ
分散物を得、その後、(5)の残部に(6)~(16)を
                                イリングムースを得た。
溶解したものをワックスの微細分散物に添加し、次い。
                                [0083]
で、(11)~(13)の混合物を添加し、スタイリングム*
          実施例3. スタイリングジェル
           (1) カルナウバロウ
                                                5. 0
           (2) キャンデリラロウ
                                                5. 0
           (3) ポリオキシエチレンベヘニルエーテル (1)EO)
                                              10.0
           (4) ラウリルジメチルアミノ酢酸ベタイン (実分30%)
                                              14.5
             [商品名:アノンBL-SF、日本油脂(株)製]
           (5) イオン交換水
                                              54. 7
           8
           (6) 合成例4のシリル化ペプチド
                                                0.0
           (?) 合成例6のシリル化ペプチド
                                                0.0
           (8) カルボキシピニルボリマー
                                                0.7
             [商品名:ハイビスワコー104、和光純菜(株)社製]
           (9) ポリビニルピロリドン/酢酸ビニル共重合体
                                                2. 0
           (10) ジグリセリン
                                                5. 0
           (11) ポリオキシエチレンオクチルドデシルエーテル
                                               適量
           (12) 香料
                                               適量
           (13) キレート剤
                                               適量
           (14) 水酸化ナトリウム
                                               適 量
           (15) エタノール
                                                3. 0
<製法>(1)~(4)と(5)の一部を約95℃で鏝 30% 混合物を添加して、スタイリングジェルを得た。
拌混合し、透明性を帯びた後、氷冷し、ヴックスの微細。
                                [0084]
分散物を得、その後、(5)の残部に(6)~(15)の※
          比較例1、セットローション
           (1) ポリビニルピロリドン/酢酸ビニル共宜合体
                                              5.0
           (2) メチルバラベン
                                              適量
           (3) 香料
                                              適量
           (4) エタノール
                                             30.0
           (5) イオン交換水
                                             60.5
           (6)シリコーン誘導体
                                              0.5
           (7) グリセリン
                                              2. 0
           (8) 大豆水素添加レシチン
                                              1. 0
           (9) カゼインナトリウム
                                              1. 0
<セットローションの製法>(4)に(1)~(3)を
                              ★ た水組部 [(5)~(9)の混合物]を加え、溶解する。
加えて均一に溶解する。とれに、あらかじめ溶解してい★ 【0085】
          此較例2. スタイリングムース
           (1) アクリル樹脂アルカノールアミン液(50%)
                                              8. 0
           (2) ポリオキシエチレン硬化ヒマシ油(60EO)
                                              酒 置
           (3) 流動パラフィン
                                              5. 0
           (4) グリセリン
                                              3. 0
           (5) 香料
                                              蒼 登
```

(2)	特闘平11-286417
37	38
(6) メチルバラベン	適 置
(7)イオン交換水	59. 0
(8) エタノール	15. 0
(9) 大豆レシチン	0. 5
(10) ヒアルロン酸	0. 5
(11) 液化石油ガス	9. 0
<スタイリングムースの製法>(3)を(4)と(2)	*充填は、エアゾール用缶に原液を充填し、バルブ装着
の溶解物に添加し、ホモミキサーで均一に乳化する。こ	後、ガスを充填する。
れを他の成分の溶液に添加し、ヘアムース原液を得た。*	[0086]
比較例3.スタイリングジェル	
(1) カルボキシピニルポリマー	0.7
(2)ポリピニルピロリドン	2. 0
(3) グリセリン	適 置
(4) エタノール	20.0
(5)ポリオキシエチレンオクチルド	デシルエーテル 適 置
(6) 香料	適量
(?)キレート剤	適 置
(8) イオン交換水	74.3
(9)エラスチン	1. 5
(16) フォスファチジルコリン	1. 5
<スタイリングジェルの製法>(1)を(3)と一部の	※通りやすさ」、「なめらかさ」、「整髪力」について評
(8)で分散する。他の成分を残部の(8)に溶解し、	価した。評価方法は、前述の通りである。結果を次に示
縄 絆している(1)、(3)、(8)の混合物に添加す	₹.
ઢ.	[0088]
【0087】上記のようにして得られた実施例品と比較	[表9]
品を試料として用い、「手のべたつき感」、「手ぐしの※	

			手のべたつ	手ぐしの	なめらかさ	整髪力
			き感	通りやすさ		
 実施例 <u>1</u>	直	後	©	<u> </u>	0	<u> </u>
	6時	間後		0	0	0
	124等	間後		©	0	
 実施例2	直	後	0	@	<u> </u>	<u> </u>
	6時	間後		0	0	0
	12時	間後		0	0	
 実能例3	直	後	0		<u> </u>	0
	6時	間後		0	0	©
	128等	間後		©	0	
 比較例 1	——— 直	——— 後	0	Δ	Δ	

286417

39				(21)		特開平11- 46	
	6時間後 12時間後				-	_	_
					-	-	
	比較例2	直	後	Δ	0		
		6時間後			Δ	-	-
	12時間後				-	-	
	比較例3	直	後	Δ	Δ	Δ	_
	6時間後 12時間後				-	-	-
					-	-	

【①①89】上記結果より、ワックスの微細分散物とシ リル化ペプチドを配合した実施例1~3の毛髪化桩料 は、手のべたつき感が少なく、手ぐしの通りやすさ、な 20 示す説明図である。 めらかさ、整髪力にも優れていることがわかる。とくに 手ぐしの通りやすさ、なめらかさにおいては、12時間 後まで良好な使用感を得ることができる。これに対し て、比較例1~3の組成物は、手ぐしの通りやすさ、な めらかさの長時間の維持ができず、しかもワックスが配 台されていないため、いずれも本発明品より整髪力がは るかに劣っていた。

[0090]

【発明の効果】以上説明したように本発明にかかる毛髪 チドを含有するので、整髪力に優れるだけでなく、なめ らかさ、べたつき感のなさ、くし通りの良さといった使 用感にも優れている。

【図面の簡単な説明】

【図1】本発明にかかるワックスの微細分散物におい *

* て、HLB9の非イオン性界面活性剤を用いた場合にお ける。界面活性剤の組成とその置及び分散状態の関係を

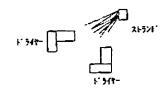
【図2】本発明にかかるワックスの微細分散物におい て、HLB13の非イオン性界面活性剤を用いた場合に おける、界面活性剤の組成とその量及び分散状態の関係 を示す説明図である。

【図3】本発明にかかるワックスの微細分散物におい て、HLB12の非イオン性界面活性剤を用いた場合に おける、界面活性剤の組成とその量及び分散状態の関係 を示す説明図である。

【図4】本発明にかかるワックスの微細分散物におい 化粧料は、ワックスの微細分散物と特定のシリル化ペプ 30 で、HLB15の非イオン性界面活性剤を用いた場合に おける、界面活性剤の組成とその置及び分散状態の関係 を示す説明図である。

> 【図5】本発明における実施例、あるいは、比較例、試 験例における組成物の整髪試験の方法を示したものであ

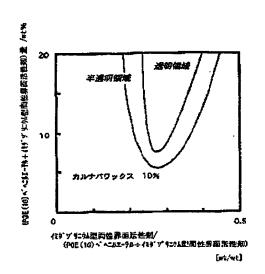
【図5】



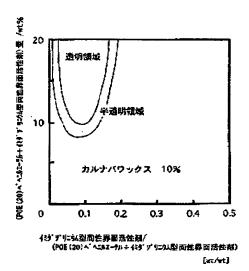
(22)

特開平11-286417

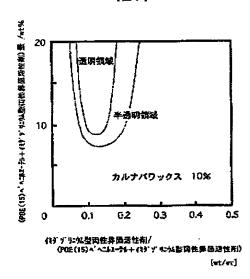
[図1]



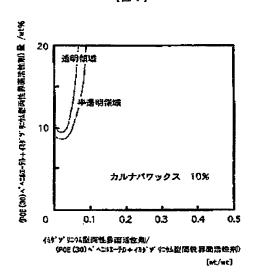
[22]



[図3]



[四4]



REST AVAILABLE CORV